

1. 授業の概要と地域社会を意識した工夫

本授業は小学校・中学校教員免許必修科目である。中等教育コースの学生（2回生以上）を対象にした授業であり、大学院生も含めて、受講生は62名であった。

道徳教育の制度的な位置づけや教育内容の理解だけでなく、指導法まで学習してもらう。前半では、道徳教育の学習指導要領上の位置づけや歴史的変遷、諸外国との違いについて講義した。後半では、道徳教育に関する理論や方法を紹介するとともに、それをふまえて学習指導案を書いてもらった。さらに、実地指導講師として愛媛県内の学校教員等を招き、地域の教育実践に根差した道徳教育の取り組みについて講義してもらった。

本年度は、初等教育コースの授業が変更になったこともあり、例年2名のところ、3名の実地指導講師に講義いただくことができた。以下、それぞれの先生の講義内容を報告し、学生のアンケート結果から意義を考察する。

2. 講義の概要と授業アンケートの結果

① 齋藤照夫先生の講義

齋藤照夫校長（松山市立生石小学校）の授業では、道徳の教科化に伴う変化や、道徳の時間の授業と学級運営との関係、合意形成型の授業スタイル等を講義いただいた。学習指導要領の変更点を抑えるとともに、潮見小学校の事例をもとに、ふだんの関わりの中で声かけを工夫したり、児童のささいな変化を記録する等の種まきが重要であることを、具体的な児童の姿とともに提示された。また、これまで一人ひとりの心の変容を促してきた道徳授業の動向に対して、話し合いを通じて互いの共通点・相違点を明らかにしながら、合意形成を図る授業方法の提案もあった。

授業アンケートでは、すべての受講生が、講義が「大いに役に立った」（13名）「役に立った」（38名）と回答していた。

また、そのうち「何が役に立ったのか」という設問に対しては、多くの学生が「授業づくりの原則」や「ふだんの学級運営の繋がり」を知れたと回答している（表1）。その他の項目も多く多くの学生が役に立ったと回答しており、

改革動向を具体的な地域の学校での実践と結びつけて解説されたからだと考えられる。

表1 齋藤先生の授業で「何が役に立ったのか」

授業づくりの原則を知れた	28人
地域の学校の様子を知れた	13人
ふだんの学級運営との繋がりなど具体的な授業の工夫を知れた	23人
道徳教育の改革状況を知れた	15人
将来の教員のイメージが分かった	7人

② 坂井親治先生の講義

坂井親治園長（西条市立小松幼稚園）の授業では、中学校校長時代の経験をもとに、「ローテーション道徳」の運用のあり方やいじめ問題に対応した授業づくり等について講義いただいた。ローテーション道徳は、教科担任制のため組織的な取組の難しい中学校において、各教員の負担を減らしながら、充実した道徳授業の改善ができる方法として全国的に注目されている。その具体的な取組事例に基づき、道徳教育推進教師の役割やTT授業の進め方、時間割編成のあり方について解説された。また、いじめ問題の対応をめぐって、生徒が主体的にいじめの定義について考えられる授業づくりの具体例を提示された。

授業アンケートでは、すべての受講生が、講義が「大いに役に立った」（13名）「役に立った」（28名）と回答していた。

また、そのうち「何が役に立ったのか」という設問に対しては、多くの学生が「ローテーション道徳など学校全体での取り組みの工夫」や「いじめに対応する授業づくり」を知れたと回答している（表2）。学校全体を見通した取り組みのため、学生にはイメージがしにくいという懸念もあったが、「目からうろこだった」という意見もあるように、中学校の実態に合わせたローテーション道徳の取り組みは学生にとって新鮮だったようである。また、最後の授業回で実施している自己評価にて、自分の学習を振り返る箇所でも、いじめ問題を扱った授業に触れる学生も多く、学生にとって坂井先生の講義が具体的な実践を構想する際の指針となったことが窺える。

表 2 坂井先生の授業で「何が役に立ったのか」

授業づくりの原則を知れた	15人
地域の学校の様子を知れた	7人
ローテーション・道徳など学校全体での取り組みの工夫を知れた	27人
いじめに対応する授業づくりについて学べた	21人
将来の教員のイメージがたった	8人

③大野誠司先生の講義

大野誠司校長（東温市立北吉井小学校）の授業では、絵本「ひとりぼっちのらいおん」を題材として、役割演技を通して具体的な授業を疑似体験させるとともに、授業の構想の仕方や効果的な役割演技の工夫等をわかりやすく説明していただいた。動作化や劇化等の関連する技法も紹介するとともに、学生一人ひとりの発言に対して肯定的に回答することの重要性も体験的に示していただいた。

授業アンケートでは、講義が「大いに役に立った」（18名）「役に立った」（32名）と回答する受講生が多数である一方で、「あまり役に立たなかった」とする回答も2名あった。

また、そのうち「何が役に立ったのか」という設問に対しては、多くの学生が「授業づくりの原則」や「動作化や役割演技の具体的な工夫」を知れたと回答している（表3）。

表 3 大野先生の授業で「何が役にたったのか」

授業づくりの原則を知れた	21人
地域の学校の様子を知れた	6人
動作化や役割演技の具体的な工夫について知れた	39人
道徳教育の改革状況を知れた	7人
将来の教員のイメージがたった	6人

上記のうち、「あまり役に立たなかった」とする回答理由は、「中学校・高校の指導法が知りたかった」「なりきることが多く、指導法の解説がほしかった」「基本的な内容が多く、応用的な内容がよかった」であった。小学校の指導法が中心となったことは、初等教育コースの授業が変更になった影響であり、授業設計者である筆者の責任である。

他方、他の2点については、「何が役に立ったのか」の回答および授業の感想と関連づけて考える必要がある。大野先生の授業は、受講生が2回の学習指導案作成を終えた授業後半に行われた。それまで受講生は道徳授業づ

くりの原理を学び、自分なりに授業をデザインする経験をしていた。その中で大野先生の授業は、多くの学生にとって、あらためて道徳授業づくりの原則を実感できたことが授業の感想からわかる。実際、「大いに役に立った」と回答している学生が18名と他の2人の先生より多く、多くの学生にとっては授業の具体的な工夫や児童生徒の意識の流れの変化を、体験的な学習を通して実感できた回であった。他方で、そうした基本的な授業づくりの方法に関する実感を超えた学習を求める学生にとっては、不満が残る授業になったのだと思われる。

次年度以降は、15回の授業の中で、どのように実地指導講師の講義を配置し、その位置づけをどのように考えているかを明確にしたうえで、受講生に意識させる必要があると思われる。他方、大野先生の授業については、昨年度も同様のアンケートを行った。その際には、「将来の教員のイメージがたった」と回答した学生が今年度より多かった。昨年度は、2コマ分を担当いただき、2コマ目に若手教員の指導案と授業風景をビデオにて紹介してもらっていた。このことが影響していると考えられる。実地指導講師には、校長経験のある先生を招くことが多かったが、それに加えて受講生に近い立場の講師に依頼することで、より教員になったときのイメージを持たせることができるかもしれない。

3. FDシンポジウム報告と授業の改善方針

本年度のFDシンポジウムは、教職教養課題特講内で実施された愛媛県内の小規模校訪問の報告を兼ねていた。この小規模校訪問は、「愛媛で教員になるモチベーションを高める教育内容・方法の充実」およびCOC+の取り組みの一環であり、受講生の交通費やバスの借上げ代等の支援を受けながら、実施されている。地域における教員養成という愛媛大学教育学部の特色をふまえ、地域の資源を活用した注目すべき取り組みである。

本プログラムは、教育学部生の中で資質・能力があるにもかかわらず、将来の教職生活に不安を抱えている学生を支援すること（モチベーションを高める）で、地域の学校教員養成を豊かにしようとしている。そのために、まずは県内各地の様々な学校の実態を知ることが大切である。とりわけ、山間部・島しょ

部の小規模校は、地域に根差した全人教育を行っている点、松山市の学校には地域連携実習等で実態を知る機会が多く提供されている点、愛媛県内の小中学校の多くは小規模校である点で、意図的に訪問機会を設ける必要性が高い。

そこで、教職教養課題特講の受講生に、愛媛県内の小規模校を訪問する機会を与え、小規模校での教員の勤務実態や具体的な実践を学んでもらおうとしたのだという。ただし、小規模校訪問は単なる単発的な体験学習ではなく、新入生セミナーや各教職科目、教科教育法にて実地指導講師を招いて地域の教育事情を知る機会を設ける等、体系的なカリキュラムに基づいて行われている。

今年度は、11月29日に上島町立弓削小学校、1月12日に弓削小学校ならびに生名小学校を訪問した。11月訪問時は、国立教育政策研究所研究指定校の中間発表会になっており、焦点授業を見学し、研究協議に参加するとともに、講演を聴講した。児童の表現力の弱さの克服するために算数の平均を求める授業において2～3人のグループになって計算方法話し合う工夫や、個人カルテに基づくきめ細かな指導方法について学んだ。1月訪問時は、弓削小学校で、校長先生に話しを聞くとともに、授業を観察した。生名小学校では、給食体験をするとともに、昼休みの全校遊びにて児童と交流した。午後の授業では、地域の「とんど」の飾りつけと歌いながら町内を練り歩く練習に参加したという。地域行事と連動した学校の取り組みを体験することができており、受講生は地域で教員になるイメージを膨らませることができたのだと思われる。また、訪問校では愛媛大学の卒業生が教員として働いており、そうした教員に触れることで、将来教員として働くことに希望がもてたと推察する。

実際、教職教養課題特講で実施されたアンケートでは、昨年度の事業で、事業に肯定的な評価をした学生が4段階のうち3点台後半、教員になる意欲が高まった学生が6割以上となっている。また、今年度の事業でも、事業に肯定的な評価をした学生が4段階のうち3点台後半、教員になる意欲が高まった学生が9割弱となっている。否定的な評価をする学生も少なからずいるが、その多くが「滞在時間を増やしてほしい」や「あらためて教員の

良さがわかったが、教員になりたい気持ちは変わらず強い」、「音楽の授業も見たかった」といったものが多く、内容としては肯定的なものが多かったのだという。このように受講生にとって小規模校の訪問は、貴重な体験になっているとともに、教員になりたいというモチベーションを高めており、大変意義のある事業だと感じた。

小規模校では、同一教室で複数の学年を同時に教える「わたり方式」や、児童それぞれの名前をすべて覚えて接する等、教員と児童の心理的・物理的距離が近いこと、上級生と下級生による縦割り活動の充実等、通常の学校では経験することのできない様々な事象がある。こうした実態を知ること、受講生にとって愛媛県で教員になるという見通しをもたせることができる取組である。

では、このシンポジウムを受けて、どのような工夫ができるだろうか。ひとつは、学部全体のカリキュラムマップを見通した工夫として、実地指導講師の講義を位置づけることである。2回生の段階で、愛媛県内の道德教育の実態を知ることが、その前後のふるさと実習や地域連携実習、教職教養課題特講と関連していよう。今回のFDシンポジウムで鴛原先生がカリキュラムマップを示しながら説明されていたが、今後は道德教育指導論内だけで実地指導講師を位置づけるのではなく、4年間を見通した位置づけを探っていききたい。

また、予算の都合もあるが、地域の様々な資源を活用して、受講生の教員になりたいというモチベーションを高めたり、将来の教員になったときのイメージを膨らませることが大切だと感じた。筆者の担当する授業でも、西予市にある「開明学校」を活用した教育史へのアプローチ（教育原論）や、愛媛県生涯学習センター内にある「愛媛人物博物館」を活用した道德教育の地域教材の開発（道德教育指導論）を考えることができる。とくに道德教育の地域教材の開発については、愛媛県独自の道德教材集「愛ある愛媛の道德」で様々な偉人が題材として活用されている。昨年度から、その中の正岡子規を題材とした「へこたれんぞな」を活用した授業を、道德教育指導論に組みこんでいる。そうした工夫を地域の資源活用と関連づけて、位置付けていくことができるかもしれない。